

鼎談

もう他処よそには 住めまない。

阿佐谷に育ったピアニストの青柳いづみこさん、
西荻、荻窪間で引越しを繰り返す歌人の穂村弘さん、
荻窪でブックカフェ「6次元」を開いているナカムラクニオさん。
沿線の居心地のいい空気に惹かれ、
気がついたら「中央線の人」になっている三人の、
少し毒気の強い沿線偏愛放談。



妻には「吉祥寺に住もう」と
言って西荻に引越した。

——これまで「東京人」では毎年の
ように中央線の特集してきましたが、
二〇〇六年十二月の新型車両導入のタ
イミングで組んだ特集「中央線の魂
オレンジ電車よ、さようなら」を最後
に、中央線特集を組んでいませんでした。
今回、この十年の間に中央線文化
はどのように変化していったのか、と

石原たきび・構成・文
text by Takibi Ishihara
門馬央典・写真
photographs by Hironori Monma

穂村弘

talk by Hiroshi Homma

青柳いづみこ

talk by Izumiko Aoyagi

ナカムラクニオ

talk by Kunio Nakamura

ほむら ひろし
歌人。一九六〇年北海道生まれ。
九〇年に歌集「シンケート」でデビュー。
詩歌のみならず、評論、エッセイ、絵本など
幅広い分野で活躍。
二〇〇八年評論集「短歌の友人」で
伊藤整文学賞評論部門を受賞。
同年「楽しい一日」で短歌研究賞を受賞。
一五年、NHK全国学校音楽コンクール
（高等学校の部）課題曲
『メイプルシロップ』の作詞を手がけた。
最新刊はフジモトマサルとの
共著によにより「記」（文藝春秋）。

あおやぎ いづみこ

ピアノスト、文筆家。

一九五〇年東京駒沢生まれ。三歳から阿佐谷で育つ。

マルセイユ音楽院首席卒業。学術博士。

現在、大阪音楽大学教授。

ドビュッシーの研究者として知られる。

二〇〇一年、「青柳瑞穂の生涯」で

日本エッセイストクラブ賞受賞。

〇九年には「六本指のゴルトベルグ」で

講談社エッセイ賞受賞。

著書に「音楽と文学の対位法」
「指先から感じるドビュッシー」など多数。
最新刊はエッセイ集

『青柳いづみこのMERDEE日記』（東京創元社）。

なかむら くにお

映像ディレクター、ブックカフェ「6次元」店主。

一九七二年東京生まれ。

フリーランスのディレクターとして
美術・旅番組を制作。

『Out & About! Journeys in Japan』などの

日本の文化を海外へ発信。

二〇〇八年、荻窪にて
実験的ブックカフェ「6次元」を開店。

著書に「人が集まる「つなぎ場」のつくり方

「都市型茶室」6次元の発想とは」

「さんぽで感じる村上春樹」。

「6次元」にて。

右へーシ・荻窪を歩る中央線



「阿佐ヶ谷会」のメンバーは、

「ピノチオ」という中華料理屋に集まっては、
将棋を指し、酒を飲んでいた。

今でも、

そのDNAが沿線に残されていると思う。

青柳

いうことを教えていただきたく、中央線にゆかりの深い三人に集まっていたきました。

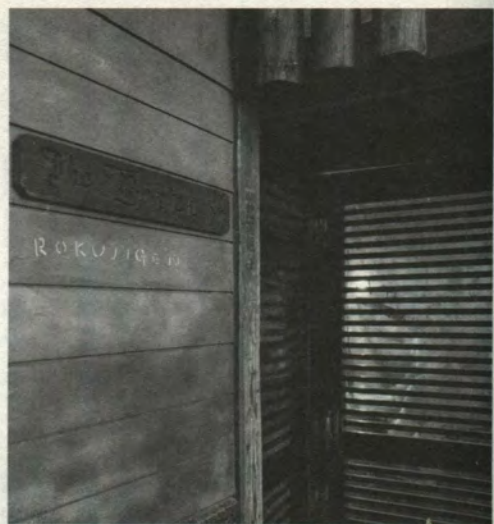
ナカムラ 僕はNHKの国際局でディレクターとして働きながら、皆が集まれるような場所を作りたいと、物件を探していました。でも、古いところでそのまま借りられるところが、なかなかなかったんです。そんなとき、たまたま荻窪のこの場所にあった有名な古本カフェ「ひなぎく」が閉まると聞いて、見学に来たらイメージどおり。内装をそのままに二〇〇八年、ブックカフェ「6次元」をオープンさせました。東京の店は経営者が替わると壊されちゃいますが、中央線沿いは居抜きでそのまま使っているという物件が多いんです。「ひなぎく」の前は伝説のジャズバー「梵天」でしたから、お客さんが三代にわたっている。いまでも、「三十年ぶりに来ました」という人もいますよ。

青柳 行きつけの鍼の治療室がすぐそばなんです。だから、この辺には毎週来ています。私は三歳で阿佐ヶ谷に引っ越してきて、井伏鱒二や太宰治らが集った「阿佐ヶ谷文士村」の名残りの中で育ったんですが、彼らと親交が深かった祖父青柳瑞穂の「阿佐ヶ谷会」にならって「新阿佐ヶ谷会」という会を開いています。阿佐ヶ谷文士好きの

作家、編集者、装丁家たちが集まって、ただお酒を飲む。文学に関する議論はあまりしない。(笑)

穂村 僕は実家が埼玉県なんですが、一九八三年ぐらいから西荻に遊びに来ました。アンティークマップを見ながら友だちと歩くんです。お店の人が「どこから来たの?」と聞くから「埼玉県です」って答えたら、「西荻も遠くから遊びに来る街になったんだ」と、感慨深そうに言ったのをよく覚えています。

それと、西荻の古書店にも行きました。もちろん、神保町や早稲田にもあるんですけど、中央線沿線は閉店時間が圧倒的に遅い。西荻の「音羽館」や「興居島屋」、吉祥寺の「よみた屋」など、深夜までやっているお店が何軒もあるような一種の異常地帯。あとは、店主が怖くない(笑)。いまはもうだいぶ違います。当時は「帽子を取れ」とか「その本は君には早い」とか言われてプレッシャーがかなりあった。全然こっちのことを知らないのに(笑)。でも、中央線沿線の店主はなぜかノリが違って、カジュアルでした。ナカムラ 荻窪の「ささま書店」が二十一時まで、「岩森書店」が二十一時半までやっているから、たしかに閉店は遅いですよね。あと、ブックオフの品数がすごく多いということで、遠く



6次元

2008年、ナカムラ クニオさんと道前宏子さんが、人が集まる「つなぎ場」として開店したブックカフェ。読書会のほか、「金継ぎワークショップ」「校正ナイト」「ショートショート講座」など、さまざまなイベントが毎晩のように行われている。また美術館や博物館とタイアップしたイベント、山形ビエンナーレのサテライト会場として地方の美術祭を紹介、海外からゲストを招いた交流会なども多数開催。3点とも店内の様子。

■杉並区上荻1-10-3 2F

展示やイベント開催時のみの営業/不定休

<http://www.6jigen.com>

荻窪駅西口より徒歩3分

からわざわざ来る人もいる。穂村さんは、いつこちらにいらしたんですか？穂村 二〇〇三年、結婚を機に西荻に引っ越しました。妻には「吉祥寺に住もう」と言っている。当時は女子の間で吉祥寺ブランドというのがあって、後で「騙された」と言われまして（笑）。その後は、西荻と荻窪の間を転々として、いまは三軒目の賃貸部屋。本があふれると、ヤドカリみたいに家を変え暮らします。

中華料理屋に集まって、将棋を指した後で酒を飲む。

青柳 戦後、祖父が西荻の「こけし屋」で「カルバドスの会」というのをやっていたんですよ。中央線沿線の文化人が集まって、カルヴァドスならぬカストリ酒を飲むという、ちよつとハイソな会（笑）。当時のパンフレットがまだうちに残っています。一方で、「阿佐ヶ谷会」の拠点は阿佐ヶ谷。戦前、西友の裏あたりにあった「ピノチオ」という中華料理屋に集まっていたのは、将棋を指した後で酒を飲むのが始まりでした。ナカムラ 中央線は文士のサロンというイメージがありますね。でも、なぜ詩人や作家が、このあたりに多かつたんでしょう？

青柳 関東大震災で下町の家が被害に遭い、西に流れてきたみたいですよ。貸家が早く、家賃も安かったから、そのまま居ついたんじゃないかな。あとは、雰囲気ですかね。井伏鱒二が荻窪に移り住んだのが昭和二年。その後、彼を慕う作家たちがどんどん引っ越してきて、そういう雰囲気はずっと続いていくでしょう。穂村 友だちから聞いたんですが、いま三鷹には、その人が知っているだけでも芥川賞作家が六人住んでいるって。（笑）ナカムラ 「6次元」も、カフェ利用のお客さんが多いかと思つたら、まず一番最初に来た人が「読書会に使わせてください」と。その後も、「朗読劇をやりたい」という人が来たり。「えっ、ここでやるんですか？」みたいな（笑）。文学や演劇の需要が多いんだなあ。いまでは、文学イベントを年間二百回くらいやっています。やってもやってもしゃがないくらい、やり続けられるという土壌がある。（笑）青柳 近頃では珍しいですね。十九世紀末のバリみたい。ナカムラ 主催者やお客さんも、中野から三鷹ぐらいいままでの人が圧倒的に多い。新宿の向こう側でもないし、三鷹より先とも違う。中央線文化の国境っぽいものがあるんですよ。青柳 発信したい人が多いんだと思う。ナカムラ 去年一年間でやったイベント

トの中でも、予約が毎回一瞬で埋まるのが、小説を書くワークシヨップなんです。読むじゃなくて自分たちで書く。まったく同じ内容のイベントを横浜のみなどみらいでやったら、あまり集客がない。読書会にしても、お昼から夜中まで十二時間。他の地域でそんなに長い時間やるかなあと思う。

青柳 読書会はどんなことを？

ナカムラ 課題図書を決めて感想を話すパターンが多いですね。ちなみに、作品の舞台が全部中央線というのもある。村上春樹が圧倒的に人気。彼のファンが主宰する読書会を、この五年間で四十五回やりました。作品に出てくる料理を再現したり、音楽を全曲聴いたり。

青柳 シューベルトの十七番のソナタとか、長いから大変そう。（笑）ナカムラ そういう文学の楽しみ方を熱心に深堀りしていくというのも、中央線独特の文化でしょうね。

中央線の女の人は、いろんな布を巻いて体の線を隠す。

青柳 穂村さん、他のエリアに引越そうと思つたことはありませんか？穂村 実は、ときどき思います。ちょっと語弊がありますが、お洒落な場所に住みたいという思いは常にあります（笑）。でも、代官山や中目黒に住む自

分を想像してみると、どうしても違和感があって。最近では妻も、「中央線の女になる覚悟を決めた」と言っています。どういう意味なのかよくわかりませんが、たえば、昨日も中目黒に行つたんですが、まず外国人のオーラが、中央線の街にいる外国人と違いますよね。このあたりを歩いている外国人の人は、オーラ的にはほぼ日本人だから気づかない。

ナカムラ 荻窪では外国人がコンビニでお酒を買って、店の前で立ち飲みしていますからね（笑）。ああいうのは、たしかに中目黒では見られない光景かも。青柳 麻布に住んでいる音楽プロデューサーと阿佐ヶ谷で食事をする、「店がどこもカジュアル」だとびびくりする。「安く済んでいいでしょ？」って言うんだけど、こつちは麻布に合わせて店を選ばなきゃならないから、ちよつと緊張します。

穂村 こういう空気感が苦手な人もいますからね。

ナカムラ ちよつとドロツツとしている部分はある。相席とかも普通だし。ここに初めて見学に来たときも、席に座った瞬間に隣の人が「サンドイッチ、半分食べますか？」って（笑）。あつ、中央線はこういう場所なんだなあ。オープン後も、常連のお客さんがお土産を持ってきてくれる。僕は目黒で生



まれ育ったので、最初はすごく驚きました。

穂村 妻も、人にものをあげたりするのが好きみたいです。「これなら喜ぶだろう」という洗練されたものじゃないから、ちよつとヒヤヒヤするんです

やっぱり中央線つて、

アウトサイダーが多いんですよ。

でも、攻撃的なアウトサイダーじゃない、

ということがポイントで、みんな大人しい。

穂村

けど。大量のみかんをあげているのを見て、持って帰るのに重いんじゃないかなとか(笑)。でも、もらった方は意外と喜んでいてるみたい。

青柳 よく行く阿佐谷の「バルト」っていうダイニング・バーも、常連客が

勝手に食材を持ってきて店の人に調理してもらおう。

ナカムラ 人と人の距離感が近いというか――。

穂村 西萩の「バルタザール」っていうお店でご飯を食べながら、こうやって首を回してたら、店のおじさんが、いきなり腕を圧してきて「ここだよ、ツボは」って。あれは嫌な人もいると思う。(笑)

青柳 結局、収入とか職業によるヒエラルキーが、中央線にはあまりない。その空間で一緒になったらみんな同じ。ときどき喧嘩はしますが、そういう平等感はあるかも。

穂村 女性編集者と喫茶店で喋っているときに、「中央線文化が嫌」と言うから何が嫌なのか聞いたら、「中央線の女の人はいろんな布を巻いて体の線を隠す」(笑)。「あの子なんかすごくスタイルがいいのに」って。

ナカムラ エスニックっぽいものを巻いている人はよく見ますね。沿線には、インディ的な匂いがちよつとする。

穂村 あれは、主体性の表現だと僕は思うんです。ハイヒール率も低い。服装がみんなちよつとずつ似ているから、四、五人の女性グループがご飯を食べっていると、天然素材感が際立つ(笑)。コットンと麻みたいな。

ナカムラ あと、お店の閉店時間を守ら

ない人が多い(笑)。他の地域つてびつたりに終わるじゃないですか。でも、このあたりは閉店してるのに夜中でも灯りがついてると「やっていますか?」って入ってくる。

穂村 やってるわけないだろう、つて。(笑)

青柳 「せつかく行ってやったのに開いてなかった」って怒るんですよ。本物の共同体だった場所の名残りのような空気はある。

ナカムラ 大友克洋さんが近くに住んでいるんですが、夜の二時とかに「打ち合わせしよう」って来る。もちろん、断れない(笑)。荻窪はアニメの制作スタジオもたくさんあるし、感覚としては「朝までいいでしょ」というのがある。

青柳 音楽ホールやスタジオは都心にあるので、たとえばコンサートの打ち上げで、そんなに高くなって、みんなでわいわい飲める店を探すのは大変。

このへんだつたらいくらでもあるのに。あと、あちらだと「これは何年ものワイン」「これは特別なチーズ」なんて言いながら出してくださるけど、それがどうも居心地が悪い。うまけりゃいいじゃんみたいな(笑)。中央線は銘柄とかじゃなくて、「安くておいしい」という説明から入る。

ナカムラ 服装でいうと、うちのお客さ

んはスーツを着ている人がほほい
ない。でも、みんな大人なんです
よ。それが大きな特徴。都心に行
くとお客さんがみんなスーツを
着ていますよね。

穂村 「共同体ごっこ」的な感
覚もあるかも。アジアごっこ
「沖繩ごっこ」みたいな。さつき
の、いきなり腕のツボを押して
くるみたいなことも、自分の性
格からして、本当のムラ的な
ところでも、ここでは「ムラご
っこ」的な人間の近さが、そん
なにプレッシャーじゃない。

青柳 共同体で思い出したのは、
もっとなくなったけど、阿佐谷に
「ランボー」というバーがあつ
て、そこはLプレコードしか
かけない。店主が酒を作りな
がら、適当に曲を選ぶ。つま
みは、焼いたスルメにマヨネ
ーズをつけただけ。要するに
全共闘世代の溜まり場で、そ
れこそ、いまでも本物の共同
体だった場所の名残りのよう
な空気はあるかも。しれませ
んね。「みんな平等」という
穂村 あの世代の夢の名残り
めいた雰囲気と、精神世界的な
ものは、とても感じますね。
つまり、いまの支配的なマ
ジヨリテイの価値観以外の
リアリティを志向する空気。
そういう感覚を持った人たちが、
なんとなく惹かれてや
つてきて、代替わりしながら
続いている。

ナカムラ この店を始めた頃は、
タバコを吸うお客さんが多
かったんですよ。でも、よく
よく聞いてみるとヨガをや
つてたり、無農薬の野菜を
食べてたり（笑）。中央線
って、その辺けっこう適
当なんですよね。

穂村 すごくわかるなあ（笑）。
やつぱりアウトサイダーが
多いということ。でも、攻
撃的なアウトサイダーじゃ
ないってことがポイントで
。みんな大人しいと思う。

昼間からぶらぶらしてても 罪悪感がまったくない。（笑）

青柳 でも、同じ中央線とはい
っても街ごとにイメージの
違いはあつて、高円寺は
ロック、阿佐谷はジャズ、
荻窪はクラシックとか。他
にも、荻窪は「ザ・ガート
ン自由が丘」という高級
スーパがあるけど、阿佐
谷でそういう食材を扱う
スーパはすぐに消える。
高円寺は、さらに家賃が
安くて古着屋が多い。
ナカムラ 距離は近いのに
微妙に違いますよね。荻
窪はヨガスクールがた
くさんあったり、「グル
ッペ」という自然食
品店があつたり。そう
いう層に向けた店が多
い。阿佐谷や高円寺に
、そういうカルチャー
はない。
青柳 阿佐谷の南のほう
はカジユアル。北はちよ
つとハイソでオリ
ーブオ

イルの店とかがありますね。
穂村 高円寺はやつぱり若い
ですよ。ナカムラ 歩いて
いる人を見ても高円寺
だけ違う。（笑）

穂村 若くてヘンな人が多
いでしょう。西荻は歳を取
ったヘンな人が多い（笑）。
ヘンな人っていうのはパ
ッと見でカテゴライズでき
ない人という意味で、つま
り私たちも、と云つていい
かな（笑）。でも、ラク
なんです。みんながちゃん
とした街に行くと、どう
も自分が浮いているよう
な感じがする。

ナカムラ 西荻は、平松洋
子さんや角田光代さんな
どの作家さんのほかに、
編集者の方も多
いですよね。

穂村 やつぱり、ゆるさ、
じゃないですかね。夜中
にコンビニに行くとか、
パジャマ姿の女子がいた
りとか（笑）。あとは、
自転車をこぎながら歌
っている人がやたら多
い。（笑）

青柳 さすがに、阿佐谷
ではコンビニパジャマ
はないな。（笑）

ナカムラ 許される空気
があるんですかね。

穂村 昔は、ほんとにダ
ークなイメージだったと
聞いています。西荻の南
口の飲み屋さん街が、代
替わりしていますね。いま
は、アジアや沖繩を思
わせる学園祭的な空間
になってる。ああいう
雰囲気好きな人は、毎日
行くんじゃないかな。

いですかね。ナカムラ
このあたりは、昼間から
ぶらぶらしていても罪
悪感がまったくない。
（笑）

青柳 主人が定年退職した
とき、最初のうちは会社
が終わる時刻になってか
ら買い物へ行つていま
した（笑）。阿佐谷は、
ちよつと昼間からぶら
ぶらしてられない感じ
がある。

穂村 阿佐谷はファミ
リィが多そう。西荻に
編集者とかが集まる
のは、ファミリィ感
がないからじゃない
かな。

ナカムラ ああ、たしか
にこの辺は独り者が
多いですよ。結婚して
三鷹から八王子ぐら
いまでの郊外に引越
したという話はよく
聞きます。

穂村 高円寺に住む若
者にファミリィ感が
ないのは当然だけ
ど、西荻は本来ファミ
リィになる年齢にな
つても安息の地として
迎えてくれる。（笑）

中野ブロードウェイは 外国人やカッブルが多い。

ナカムラ 「6次元」も、
外国人の観光客がずい
ぶん増えました。秋
葉原、中野ブロード
ウェイ、三鷹の森ジ
ブリ美術館を回つた
後でここに来る。口
コミで広まっている
みたいなんです。彼
らがこういう中央
線文化にすごく興
味を持っている
というのが面白
い。
青柳 日本のお上り
さんは絶対に
行か

ない特殊なルート(笑)。外国の人はア
ニメがすごく好きですよ。ね。
穂村 中野ブロードウェイは僕もよく
行きますが、最近は外国人やカップル
が多い。かつてオタクは孤独な男性と
いうイメージがあったんだけど。すこ

いのは、外国人もちゃんとオタクの顔
をしていること。ピンテージ的な漫画を
指差しながら流暢な日本語で「これ、
状態いいよね？」って聞いている。(笑)
—— 萩窪、西萩は最近、何か変化は
ありますか？

外国人の観光客もずいぶん増えましたね。

秋葉原、中野ブロードウェイ、

三鷹の森ジブリ美術館を回った後で、

「6次元」に来るといいう人が多い。

ナカムラ



穂村 うーん、アンティークシヨップ
が減ってビストロやカフェが増えたと
いうかんじですね。

青柳 阿佐谷は、新興団地は北ではな
く青梅街道向こうの成田。南のほうの
商店街は、昔ながらの店がほとんどな
くなって、チエーンのドラッグストア
に変わっちゃった。(笑)

ナカムラ 沿線全体が少しずつ変わっ
てきていますよね。萩窪は元リプロ池
袋本店のマネージャーだった辻山良雄
さんが「Title」という新刊書店
を開いたばかりだし、阿佐谷も「コン
コ堂」を含めて古書店が何軒かできた。

穂村 西萩の古書店では「なすな屋」
がなくなっちゃいましたが、「にわと
り文庫」や「音羽館」は健在。あと、
「音羽館」で働いていた人が沿線で新
たに古書店をオープンさせるといいう動
きもある。阿佐谷の「コンコ堂」も三
鷹の「水中書店」も、みんな店構えが
似てて、いいかんじなんですよね。

—— 杉並区は近年、お屋敷や暗渠な
ど、区内に眠っている文化資産を掘り
起こしたいと考えているようです。こ
れも、いままでになかった新しい動き
です。

青柳 上林暁邸は取り壊されましたが、
井伏鱒二邸はまだある。

ナカムラ 中央線は、なんといっても散
策に適したルートが豊富。太宰好きの

人は萩窪と三鷹を歩くし、ああいうの
も特別な文化資産でしょうね。個人的
には、沿線に新しい文士村みたいなも
のを作りたいという思いが強くある。

文学イベントもすごく需要が高いし。
青柳 あの人はあそこに住んでいるら
しいってというのは、口コミでわかるん
ですけど、昔の文士村みたいな地図が
作れたら面白いかも。中央線沿線から
の発信で、出版界が活性化されますね。

穂村 大島弓子さんの漫画には、三鷹
が「夜鷹」、吉祥寺が「痴気情事」、西
萩が「昼萩」という名前が出てきて、
一方で「吉祥寺は自分にとって世界一
いい街」とおっしゃっていたので、い
までもそういう思いがあります。あと、
吉祥寺では榎図かずおさんにも遭遇す
るし、僕にとってこの二人は憧れのス
ーパースター。(笑)

ナカムラ 本当に吉祥寺では榎図さん
にしょっちゅう会う。赤白のシマシマ
Tシャツを着て、すごいスピードで歩
いている。(笑)

穂村 僕、榎図さんを見つけると後ろ
にびったりくっついて歩くんですよ。
「いま、俺は榎図かずおと同じものを見
ている」って。(笑)

ナカムラ 榎図さんと穂村さんに会え
る中央線はすごいこと。(笑)

穂村 いやいやいや、恐れ多いです。
(笑)